



TITLE:

学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2008年度

AUTHOR(S):

木村, 裕

CITATION:

木村, 裕. 学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2008年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書 (2007-2011年度): 32-33

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179745>

RIGHT:

京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2008年度

1. 京都市立高倉小学校との連携

京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座教育方法分野の研究室（以下、教育方法研究室）の大学院生は2003年度以来、京都市立高倉小学校（以下、高倉小学校）の教師との共同授業研究「プロジェクトTK」に取り組んできた。「教師が育つ・子どもが育つ・院生が育つ」をキャッチ・コピーに進められてきた「プロジェクトTK」は今年度で6年目を迎えた。このキャッチ・コピーには、「子どもが育つ」という共通の目標に向かって教師と大学院生が協働することと、研究を進める中で、教師は授業づくりや授業実践の力量を高め、大学院生は教師とともに授業づくりや授業の改善に取り組むための力量を高めることをめざすという決意が込められている。「プロジェクトTK」は現在、教育方法研究室に所属するすべての大学院生が関わる重要な研究活動の1つとなっている。

「プロジェクトTK」の主な特徴は、①研究者として発達途上にある大学院生が集団で授業研究に取り組んでいること、②学校全体と研究室全体が「面と面」で関わっていること、③日常的・継続的な関わりを基礎に実施されていること、にまとめられる。こうしたスタイルは、6年間にわたるこれまでの活動を通して少しずつ形づくられてきた。そして現在、大学院生は、「学校現場における授業研究の実施」と「研究会の実施」という2つを柱として、「プロジェクトTK」を進めている。本報告では、今年度の活動内容を中心に大学院生の取り組みの具体像を紹介する。



▶2008年度教育方法研究室的メンバー

2. 学校現場における授業研究の実施

高倉小学校にはいくつかの校内研究部会が設置されている。大学院生は今年度、「教科等部会」および「リテラシー部会」での活動に関わっている（また、コラボレーション・センターの赤沢真世助教は「英語活動部」の活動に関わっている）。教科等部会とは、国語科、算数科、理科、社会科の4教科の研究に取り

組む教師と大学院生から構成される部会である。ここでは4教科すべての授業で共通して取り組むべき研究課題を設定し、授業研究を通してその課題の解決に取り組んでいる。同部会では昨年度より「各教科においてグループ学習を重視しながら、各教科の力と読解力を育成していく」という課題に取り組んでいる。今年度は特に、子どもたちの主体的な学びを育てるための「効果的なグループ学習のあり方」と「ワークシートのあり方」について研究を進めてきた。

リテラシー部会は教科ごとに設置された部会である。そこでは、教科等部会での研究課題および取り組みを意識しながら、教科ごとのテーマに沿って、各教科の授業づくりと授業改善に取り組んでいる。



▶研究課題を決めるためのワークショップの様子

今年度、大学院生は全員で教科等部会に関わるとともに、算数班、理科班、社会科班を組織し、これら3教科の班に分かれてリテラシー部会にも参加している。これにより大学院生は、自身が所属するリテラシー部会の教科を中心として授業づくりに取り組むとともに、他教科の研究授業に参加したり、教科等部会での議論に参加したりしている。

自身が担当する教科の授業への関わりの基本となっているのが、指導案検討、日々の授業の観察、授業感想シートの記入である。指導案検討は、同一教科に関わる教師と大学院生が直接顔を合わせて行う場合もあれば、指導案を大学院生が預かり、後日コメントを返すという場合もある。検討に際して大学院生は、過去の研究蓄積に学ぶことでその単元のポイントを把握するとともに、授業プランのイメージを持ったうえで検討に臨むよう心がけている。指導案検討に関わることはまた、教師のねらいに即して授業観察を行い、その結果をフィードバックすることにつながる。

このような指導案検討をふまえて、日々の授業の観察と授業感想シートの記入を行っている。観察に際しては、授業における教師のねらいや教科等部会およびリテラシー部会の研究課題を常に念頭に置いている。日常的・継続的に授業を観察することは、その教師の

授業の特徴を知ったり、少しずつ表れてくる取り組みの成果を知ったりすることにつながる。また、クラスの子どもの様子や成長の過程を教師と共有することにもつながる。これにより、長期的な視野に立って実践の歩みや成果を把握することが可能になっている。

授業感想シートとは、大学院生が授業を観察する中で気づいたことや疑問に思ったこと、教師に伝えておきたい子どもの様子、その後の取り組みに対する提案などを記入するものである。授業観察の結果は授業後の休み時間などを利用して直接教師に伝えることも多いが、いつも十分な時間をとることができるとは限らない。そこでこの授業感想シートを授業後に記入し、授業者の教師に渡すようにしている。授業感想シートは教師と大学院生とのコミュニケーション・ツールとしての役割を果たすとともに、記入を通して大学院生の思考を深めたり、教師とのより深い意見交流を促したりするという機能も持っている。さらに、授業感想シートは授業記録としても機能するため、それまでの取り組みをふりかえりながらその後の授業を構想したり、研究を進める際の資料として利用したりすることを可能にしている。

これら一連の活動を通して大学院生は、集団で日常的・継続的に学校現場に関わり、高倉小学校の教師とともに教科等部会およびリテラシー部会の研究課題に取り組んでいる。

3. 研究会の実施

「プロジェクトTK」における大学院生の重要な役割の1つとして、教師が行う実践を理論的に位置づけていくということがある。そのためには、教育学の分野で蓄積されてきた理論的な研究成果に学ぶことで高倉小学校の実践を相対化し、その特徴を記述していく作業が必要になる。また、教科等部会の研究課題に取り組むために、教育学の理論的な知見を高倉小学校の文脈で生かすことも重要である。そこで大学院生は、学校現場での授業研究を支えるために「フィールド研究会」と呼ばれる自主的な研究会を実施している。



▶フィールド研究会の様子

「フィールド研究会」ではこれまで、PISA調査に関する論考や文部科学省による提案などを素材として

「リテラシー」や「読解力」について学習会を行ったり、高倉小学校で議論されている各教科における「リテラシー」や「読解力」の特徴を理論的な側面から検討したりしてきた。また、大学院生は授業観察を進める中で、「単元や授業における学習課題を明確化するためのツール」「目標達成に向けた子どもの学習活動を誘導・促進するためのツール」「評価のためのツール」という3つの機能を併せ持ったワークシートをつくることにより、子どもの主体的な学び合いと確かな学力形成が促されるのではないかと考えた。そこで「フィールド研究会」において、これまでの研究蓄積に学びつつ、授業における事実即してこうしたワークシートのあり方についての研究を進めてきた。

このように「フィールド研究会」は、集団で授業研究に関わるために必要な情報の共有や研究方針の確認、学校現場での授業研究を支える基礎的な研究を大学院生が行う場としての役割を果たしている。

4. おわりに

ここまで見てきたように、「プロジェクトTK」は学校現場での授業研究の実施と研究会の実施を柱として進められている。研究者として発達途上にある大学院生にとってこの「プロジェクトTK」は、教育方法学研究者として現場に関わるということの自分なりの意味や自らのスタンスを模索し、自らのアイデンティティを確立することや、授業研究の進め方を考えるための重要な機会となっている。そしてまた、6年間の取り組みの中で共同授業研究のスタイルがある程度確立されてきたことにより、新たに入ってくる大学院生が研究に加わることも次第にスムーズになってきた。しかしこれは、あらかじめ整えられたスタイルに従って漫然と現場に関わることを許してしまいかねない面も持っている。これまでの研究蓄積やノウハウを研究室内で伝承しつつ、「教師が育つ・子どもが育つ・院生が育つ」ことをめざして、常に新たな挑戦を続けていくことが今後の課題である。

なお、「プロジェクトTK」の成果はこれまで、平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究C2：研究代表者 田中耕治「学力向上をめざす評価規準と評価方法の開発」研究課題番号16530502）研究成果中間報告書『高倉小学校と京都大学大学院との連携による授業研究』や学会発表（たとえば、2006年10月に福島大学で開催された日本教育方法学会第42回大会）、あるいは高倉小学校の研究紀要などで公表してきた。また、『内外教育』（第5772号）に取り上げられたり、東京学芸大学の教員および学生の視察を受けたりするなど、外部からの注目度も高まってきている。今後も研究の成果を公表し、議論を行いながら、取り組みの質を高めていくことをめざしたい。

（文責：木村 裕）